〔研究ノート〕

人間科学部「人間関係の理論と実践」実践報告

――体験学習（キャンプ）の19年間の推移と新型コロナウイルス禍のもとでのその意義――

村　山　満　明
楠　本　秀　忠
今　井　正　裕
三　井　規　裕

１．体験学習（キャンプ）について

(1) 人間科学部「体験学習（キャンプ）」

大阪経済大学人間科学部の「体験学習（キャンプ）」は，2002年の学部創設時より，人間科学部の特色を打ち出すために導入された。学部の新入生約200名を２期に分け，約100名ずつが２泊３日でキャンプを行うというもので，野外活動場面では８名前後の活動班に分かれて，班毎に設定された課題に取り組み，それを解決していく過程で「豊かな人間関係作り」をめざすことを目的としている（楠本・中尾・谷所，2013a)。当初は大阪府総合青少年野外活動センター（所在地：大阪府豊能郡能勢町）のキャンプ場を会場として実施してきたこともあって，キャンプと称しているが，必ずしもテントを張ったり，多くの食事を野外自炊で賄ったりしてキャンプをするというものではなく，野外活動などの種々の活動を通じて実際に人間関係を築いていく体験をしながら，その中で人間関係づくりについて体験的に学ぶこと（体験学習）をねらいとしている。その推移については後述するが，2007年度からは「人間関係の理論と実践」として事前事後学習を含めて正規授業化され，2011年度より会場が吉野宮滝野外学校（所在地：奈良県吉野郡吉野町宮滝）に変更になり，2012年度からは「体験学習（キャンプ)」が１泊２日となって，現在に至っている[1)]。なお，2005年度以降になって，本学の他学部でもオリエンテーションの一環として，新入生キャンプが導入されている。

この「体験学習（キャンプ)」――以下,「キャンプ実習」ということがある――は，新

1）2002～2011年の「体験学習（キャンプ)」の推移については，楠本ら（2013a）の表１において紹介されている。なお，同表の2011年の内容のポイントの欄に「事前講義２回＋１泊２日＋事後講義５回……」とあるが，１泊２日に変更になったのは上述のとおり2012年度からであるので，正しくは,「事前講義２回＋２泊３日＋事後講義５回……」である。ここで訂正しておきたい。

表1　キャンプ実習（2泊3日）プログラム

時間	1日目（金）	2日目（土）	3日目（日）
6：30		起床　洗面	起床　洗面
		朝の集い・散策～大自然を満喫するアクティビティ～	**朝の集い・散策～大自然を満喫するアクティビティ～**
7：00		朝食簡単クッキング（洋食）	朝食簡単クッキング（和食）
7：30			
8：30	大学集合	ウォークの準備・作戦会議	寝具整頓
9：00	バス乗車・出発	**ディスカバリーウォーク～チームビルディングのアクティビティ～**フォトマップを頼りに，未知のゲレンデへ！　自然の中を歩き，課題解決に取組む中で，自分自身や周囲の人の新たな面に出会うアクティビティ	**ハートアクティビティ Part 2～信頼関係を築くアクティビティ～**エレメント（構築物）を使用した，ダイナミックなアクティビティに挑戦！　メンバーの信頼関係を築く
	↓		
10：00	↓		
	吉野宮滝野外学校到着		
11：00	開校式・オリエンテーション		
	入室		
	名札作り・班の役割分担など		学校内清掃
12：00	昼食簡単クッキング（和食）	昼食（コース途中での弁当）	昼食
		↓	荷物整理・レポート記入
13：00	**ハートアクティビティ Part 1～人間関係作りのアクティビティ～**様々な課題に取り組む活動を通して，人間関係を深め協力関係を築くアクティビティ	↓	まとめ・閉校式
		チーム毎にゴール後，シャワータイム＆パフォーマンス練習夜のパフォーマンスナイトの出し物を考える	吉野宮滝野外学校　出発
14：00			↓
			↓
15：00			大学到着・解散
16：00	**アウトドアクッキング（夕食）～コミュニケーション促進のアクティビティ～**“キャンプの定番”カレーライス作り　薪を使っての火力調節と上手な役割分担が美味しいカレーのポイント！	**アウトドアクッキング（夕食）～アウトドア料理を楽しむアクティビティ～**ダッチオーブン料理「魔法の鍋」ダッチオーブンを使ったワイルド料理に挑戦！ローストチキンを作る	
17：00			
18：00			
19：00	**上級生リーダーによるプログラム～大学への理解を深めるアクティビティ～**詳しい内容はお楽しみ！※	**パフォーマンスナイト～コミュニケーションを高めるアクティビティ～**班で考えたパフォーマンス発揮の場，全体でのコミュニケーションを深める	
20：20	**グループフラッグ作り～チームの意識を高めるアクティビティ～**		
23：00	班長ミーティング シャワー＆フリータイム 就寝（宿舎泊）	班長ミーティング シャワー＆フリータイム 就寝（宿舎泊）	

※大学生活を行う上で必要な事柄について上回生が新入生からの質問に答える「ややわかり！　人間科学部」
楠本・中尾・出所（2013b）をもとに作成

入生を対象としており，大学の初年次教育あるいは導入教育という意味も大きかった。2泊3日で行っていたときの「キャンプ実習」のプログラムの概要は表1のとおりであったが[2)]，当初はその実施にかかわる教員だけにとどまらず学部教員の多くが「キャンプ実習」に参加し，特に1日目の夜などにはそれらの教員と新入生とが語り合うことのできる時間なども設けられていて，教員と新入生とが交流できる機会ともなっていた。また，実施2年目からは上級生がスタッフ――「支援スタッフ」「学生スタッフ」「キャンプリーダー」「ボランティアリーダー」などいろいろな呼称が用いられているが，以下ボランティアリーダー（V. L. と略記）で統一する――として参加するようになり，それによって，新入生同士はもとより，新入生と上級生との関係が構築できる場にもなった。新入生の中には，

2）さらにその具体的な内容については，楠本ら（2013a）に紹介されている。

入学して大学で友人ができるだろうかという不安を抱いていることがあるが，それらの学生が2泊3日を一緒に過ごす中で，これからの大学生活を共にする友人や先輩と出会えることも少なくなかったと思われる[3)]。

(2) 人間科学部「体験学習（キャンプ）」の推移

「体験学習（キャンプ）」の2002年の導入から2020年までの推移を表2にまとめた。上でも少し触れたが，人間科学部が完成年度を迎え，2007年度からカリキュラムの改正が行われた際に，「体験学習（キャンプ）」は「人間関係の理論と実践」として人間科学部の学生全員が履修・修得すべき必修科目として授業化された。それまでは，「体験学習（キャンプ）」は大阪府青少年活動財団[4)]の全面的な協力のもとで人間科学部の学部行事として行われていたが，授業化されてからも引き続き同財団に委託する形で実施されることになった。授業化されてからは，学部執行部がその担当教員を決め，その教員がコーディネーターを務めるコーディネーター型授業の形態で運営されている[5)]。また，「人間関係の理論と実践」の授業全体の構成はおおよそ表3のとおりであり，「キャンプ実習」を挟んで2回の事前学習と5回の事後学習とを行う内容となっている――以下，「キャンプ実習」と事前事後学習とを含めた授業全体を指す場合，「理論と実践」授業ということがある。事前事後学習を行うことで，「キャンプ実習」がその柱となっていることには変わりはな

表2　人間科学部における体験学習（キャンプ）の歩み

年度	事項
2002	人間科学部の設立にあわせて，2泊3日の新入生体験学習（キャンプ）を大阪府総合青少年野外活動センター（大阪府豊能郡能勢町）で実施
2003	ボランティアリーダー（キャンプ実習をサポートしてくれる上回生リーダー）を導入
2005	他学部も新入生オリエンテーションの中にキャンプ（1泊2日）を導入（経営学部は2006年～）
2007	「人間関係の理論と実践」として正規授業（必修）化し，事前学習2回，事後学習5回を実施
2011	大阪府総合青少年野外活動センターの閉所により，会場を吉野宮滝野外学校（奈良県吉野町）に変更
2012	予算の縮小で体験学習（キャンプ）を1泊2日に変更
2018	学部カリキュラムの変更にあわせて，必修科目から必履修科目に変更
2020	新型コロナウイルスの問題により，秋学期に延期して，大学およびその周辺を利用して実施

3）人間科学部の「キャンプ実習」に続いて，他学部でも新入生キャンプが導入された理由としては，当時，学生の退学率がやや高くなっていたということもあった。本学教務課がその後調査したところでは，キャンプを導入してからは（他の要因も考えられるところであり，もちろんそれだけが理由とは言いきれないが）退学者がやや少なくなる傾向が認められているとのことである。

4）1956年，大阪府を中心とした青少年育成のために設立された財団法人。青少年のための野外体験活動の機会提供，野外活動施設の運営，指導者の育成，大学生ボランティアリーダーの養成などに取り組む青少年育成の専門団体。人間関係を豊かに築くHRT（ハート）プログラム等を開発し，小学生から青年，社会人層に至る幅広い世代の「関係づくり」活動を推進している。

5）実際には，その導入に尽力してきた楠本が継続的にかかわり，学部執行部（学部長，副学部長，学部長補佐）のうちの1名と合わせて2名でコーディネーターを担当していることが多い。

表3　「人間関係の理論と実践」の授業の構成

回	テ　ー　マ	説　明
1	授業オリエンテーション	授業概要とキャンプ実習のねらいとフィールドの理解
2	体験学習の事前ガイダンス	キャンプ実習のプログラムの説明，班編成と役割分担
3	人間関係作りの実践　体験学習（キャンプ）	
4	体験学習の振返り①	班ごとに「キャンプコラージュ」企画・作成
5	体験学習の振返り②	同上続き
6	体験学習の共有	全体で「キャンプコラージュ」発表
7	体験学習の一般化	「ビーイング～キャンプからキャンパスへ～」作成
8	授業のまとめと今後に向けて	全体で「ビーイング」発表，ミニ講義とレポート作成

いが，それらの期間を含めて活動が継続することになって，人間関係づくりにつながりやすくなるとともに，その成果が「キャンプ実習」だけで終わることなくその後の学生生活に活かされやすくなったものと考えられる。

2011年度から会場が吉野宮滝野外学校に変更になったのは，大阪府総合青少年野外活動センターが閉所になったことによる。当時の橋下大阪府知事により同活動センターの閉所方針が打ち出されて，代替施設を見つけなければならなくなったが，大阪府青少年活動財団がそれに替わる活動拠点として，廃校になっていた吉野町立中荘小学校を活用して新しく吉野宮滝野外学校を開所することとなって，そちらに会場を移したものである。

2012年度からは，それまで2泊3日だった「キャンプ実習」が1泊2日に変更になっているが，その一つの理由は予算上の問題であった。表4には1泊2日になってからの「キャンプ実習」のプログラムを示した[6)]。先に表1に示した2泊3日であったときのプログラムの多くを引き継いで構成されているが，従来は2日目に午前から午後にわたって行われていたディスカバリーウォークが，1泊2日になってからは2時間のウォークラリーに置き換えられるなど，期間の短縮により野外での活動がコンパクト化されていることは否めない。全体的に凝縮された内容としてよく構成されてはいるものの，以前のように新入生と教員とがゆっくりと話をしたり，プログラムの合間に談笑したりするようなゆとりの時間は設けにくくなった。それも一因となって，初期の頃に比べてコーディネーター以外の教員がこの「キャンプ実習」に参加することが少なくなってしまったことは，大変残念なことである。

2018年度からは必修から必履修科目[7)]に変更になっているが，学生の中には「キャンプ実習」も含めた授業プログラムへの参加がどうしても難しい者もいることなどから，そのように変更されたものである。なお当然のことながら，車椅子の学生など障がいがある場合でも，物的ならびに人的環境をできるだけ整えることによって，可能な限りプログラム

6）1泊2日になってからのプログラムについては，楠本（2019）により詳しい説明がある。

7）1年次の履修登録は必須で，その登録変更もできないが，諸事情により授業に出席できなかったり単位を修得できなかったとしても，再履修の必要はなく，それ以降はその単位数を他の科目によって代替できる。

表4　キャンプ実習（1泊2日）プログラム

1日目		2日目		
時間		時間	［A班～F班］	［G班～L班］
		6：30	起床・洗面・シーツ返却・寝具整頓	
		7：00	**朝の集い～朝の自然を感じ1日のスタートを切るアクティビティ～**	
		7：20	宿泊室清掃・ルームチェック	
		7：50	朝食簡単クッキング（和食）	
9：00	大学集合			
9：30	バス乗車・出発 ↓ ↓	9：30	ウォークラリー競技説明	**ハートアクティビティ Part 2～信頼関係を築くアクティビティ～**エレメント（構築物）を使用した，ダイナミックなアクティビティに挑戦！ メンバーの信頼関係を築く
11：00	吉野宮滝野外学校　到着 開校式・オリエンテーション 入室	10：00	**ウォークラリー～チームビルディングのアクティビティ～**コマ地図を頼りに未知のゲレンデへ！　自然の中を歩きながら班で課題に取組むアクティビティ	
12：00	昼食簡単クッキング（和食）	12：00	昼食（提供）	
13：30	グループタイム **ハートアクティビティ Part 1～人間関係作りのアクティビティ～**様々な課題に取り組む活動を通して，人間関係を深め協力関係を築くアクティビティ	13：00	**ハートアクティビティ Part 2～信頼関係を築くアクティビティ～**エレメント（構築物）を使用した，ダイナミックなアクティビティに挑戦！　メンバーの信頼関係を築く	ウォークラリー競技説明 **ウォークラリー～チームビルディングのアクティビティ～**コマ地図を頼りに未知のゲレンデへ！　自然の中を歩きながら班で課題に取組むアクティビティ
15：30	グループタイム	15：30	共同清掃・荷物整理・レポート記入	
16：00	**アウトドアクッキング（夕食）～コミュニケーション促進のアクティビティ～**“キャンプの定番”カレーライス作り　薪を使っての火力調節と上手な役割分担が美味しいカレーのポイント！「魔法の鍋」ダッチオーブンを使ったスペシャルメニューも紹介	16：00	まとめ・閉校式 吉野宮滝野外学校　出発	
		16：30	バス乗車・出発 ↓ ↓	
19：00	**パフォーマンスナイト～コミュニケーションを高めるアクティビティ～**班で考えたパフォーマンス発揮の場，全体でのコミュニケーションを深める	18：30	大学到着・解散	
	班長ミーティング シャワータイム＆夜のコミュニケーションタイム			
23：30	就寝準備			
24：00	完全消灯・就寝（宿舎泊）			

に参加してもらうようにしている。

「体験学習（キャンプ）」のこれまでの歩みについては，上級生のV. L. が果たしてきた役割を抜きにしては論じられない。その役割等にも少しずつ変化が認められるが，それに関しては後ほどV. L. について述べる中で触れることにしたい。

(3) 費用その他

「人間関係の理論と実践」の実施については，「キャンプ実習」だけでも数百万円の費用が必要である[8)]。また，「キャンプ実習」だけでなく，V. L. 研修にもかなりの費用を必

要としている[9]。それらについては基本的に全学的な予算の中でまかなわれてきたが，人間科学部のV.L.研修については，その研修を手厚くしていることにより，他学部も含めた大学全体としての新入生向けの教務予算の中から支出されるとともに，学部としての予算枠の中からも一部支出されてきた[10]。

それから，「理論と実践」授業については2016年の大学基準協会による本学の認証評価（報告書は2017年度）においても委員から高い評価を受けている[11]。このときの実地調査においては，V.L.経験者からのヒヤリングも行われている。

2．ボランティアリーダーの役割とその養成研修

(1) ボランティアリーダーの役割

「キャンプ実習」は，2回目となる2003年には1期生の2年生からV.L.を募集し，そのサポートも得て実施された。そして，年次の進行により2005年には2年生から4年生までV.L.が揃い，以降，現在に至るまで，毎年数十名のV.L.の協力を得てその運営が行われている。また，授業化されてからは，V.L.には「理論と実践」授業の全体にわたって継続して参加してもらっている。

図1には「キャンプ実習」のスタッフ組織をV.L.を中心として図示した。各V.L.の役

8）他学部も含めれば1千万円以上が必要となるこれらの予算については，文部科学省の大学教育高度化推進特別経費うちの教育・学習方法等改善支援経費（https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/05030803/003.htm）から，人間科学部については2003～2009年の7年間，他学部の新入生キャンプについては2005～2008年の4年間，その補助が得られていた。

9）他学部の新入生キャンプも上級生リーダーの協力のもとに実施しており，そのためのリーダー研修を行っている。

10）V.L.研修には確かにかなりの経費を支出しているが，後述するように，人間科学部のV.L.は2期（事前・事後学習では火曜日組と水曜日組）分けて行っている授業において，原則としてその全員が2回の「キャンプ実習」本体だけでなく，すべての事前・事後学習に参加してその活動をサポートしてくれており，それにかかわる時間数は一人あたり授業時間だけでも65時間程度，その前後の準備やミーティングなども含めれば，少なく見積もっても98時間程度になると考えられる。V.L.の人数が40人として，その延べ時間数は3,920時間となる。それだけの学生をSAもしくはTAとして採用することを考えれば，V.L.はその研修費に比して同等もしくはそれ以上のものを授業を通じて還元してくれているものと考えることができる。また，人間科学部の新入生歓迎会においてもV.L.がそのサポートに入ってくれている場合があるなど，「キャンプ実習」以外でも協力してもらっているところもある。なお，2020年度からは，大学の予算の仕組みが変更になったことにより，「キャンプ実習」にかかわる予算は，「キャンプ実習」本体ならびにV.L.研修にかかわる支出のすべてを学部予算の中に含めるように変更となっている。

11）大学基準協会による2017年の本学に対する「大学評価（認証評価）結果」では，人間科学部の教育課程・教育内容の評価において，次のとおり述べられている。「教育内容については，初年次教育の「人間関係の理論と実践」では，「キャンプ実習」を中心としながら，その前後に数回ずつ行われるグループ活動を含んだ事前事後学習と合わせて，学生同士の親密な人間関係作りという重要な役割も果たし，高学年のボランティアスタッフにとっても人間関係作りの実践や協働性等を培ううえで大きな経験となっていることは高く評価できる。」

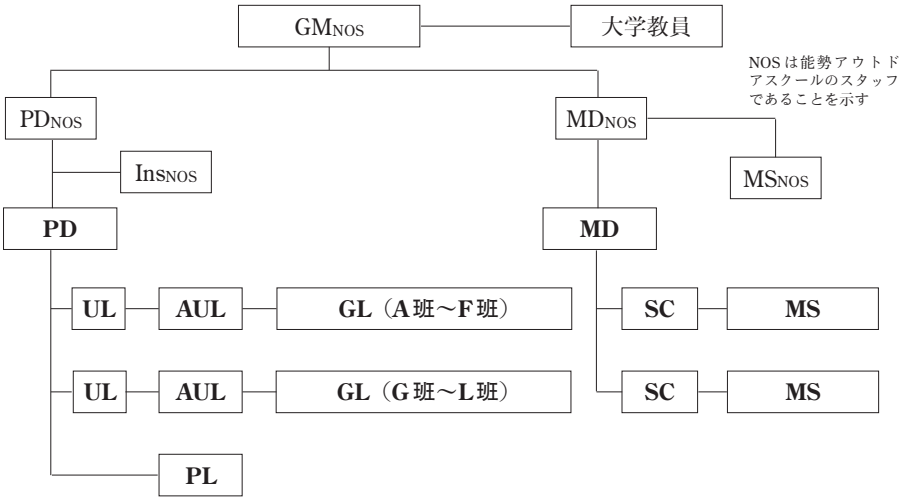

図１　体験学習（キャンプ）のスタッフ組織図

楠本ら（2013a）をもとに，それ以降の状況などもふまえて修正して作成

PD（Program Director）: プログラム運営の責任者。PD_{NOS}の指導のもとで，プログラムの進行状態と UL を通じ GL と新入生の様子・グループの状態を常に把握し，プログラムの調整，進行，UL への指示等を行う。

UL（Unit Leader）: GL を通して新入生の様子やグループの状態を常に把握し，PD に伝える。PD からの指示や連絡事項等を GL に伝えるとともに，必要に応じて GL にアドバイスし，GL と新入生をサポートする。

AUL（Assistant Unit Leader）: UL に付き，GL や新入生の動きを観察し，UL をサポートする。

GL（Group Leader）: 新入生一人ひとりの様子とグループとしての状態を常に把握し，新入生間の交流を促進する。UL に新入生の様子やグループの状態を伝え，UL からの指示や連絡事項を新入生に伝える。

MD（Management Director）: キャンプ全体のマネジメント関係の責任者。MD_{NOS}の指導のもとで，参加者全員の健康管理を担い，プログラム展開に必要となる様々な準備と管理を行う。

SC（Staff Chief）: MD の指示を具体化し，MS に指示を出す。MS をまとめ，野外学校の環境整備に努める。

MS（Management Staff）: SC の指示のもと，野外学校の環境整備や，食事の準備等にあたる。プログラムの展開により，一時的にプログラムのサポートに入ることもある。

PL（Personal Leader）: 常に１対１で相手の新入生と一緒に行動し，相手に合わせてサポートする。相手の新入生の様子とグループの状態を把握し，GL と連携をとる。

GM_{NOS}（General Manager）: キャンプの統括責任者。大学教員と連携し，キャンプ全体の運営に携わる。

PD_{NOS}: キャンプ中に行われる活動の計画，実施の責任者であり，実際の指導について指揮を執る。PD や GL への助言，指導も行う。

MD_{NOS}: キャンプに必要な資材や装備品，食事，保健などの責任者であり，PD_{NOS}との連携のもと MD や MS_{NOS}と協働してそれらの準備や管理を行い，スタッフも含めた参加者全員の安全や健康を図る。

MS_{NOS}: MD_{NOS}の指示の下にキャンプの活動準備，運営など，キャンプ全体を支える。

Ins_{NOS}（Instructor）: 各プログラムの実施，指導に当る。

割は固定されているわけではなく，「キャンプ実習」ごとに役割を入れ替えたりしながら組織が組まれる。新入生を各期（曜日）12班に編成するため V. L. が各班２名ずつで24名，全体のプログラムの進行や管理を行う役割の者（PD, MD など）が数名，活動プログラムを裏方的に支える者（MS 等）が５～10名前後といったところが構成の基本となる。PL は必要がある場合にのみ置かれ，また，その年度の V. L. の人数によっては，AUL や SC

などは特に置かれないこともある。ちなみに，各班ではV.L.のGLとは別に1年生の班長も選出され，プログラムが進むにつれて，班での活動はGLのリードから1年生班長によるリードへと移っていくように配慮がされる[12)]。

V.L.には，プログラムの中で1年生の活動を補助するだけでなく，「理論と実践」授業全体にわたって，そのプログラムの進行そのものも担当してもらっている。現在では，PDおよびMDがチーフとなって（複数チーフ制），当日のプログラムを運営するとともに，大学教員と連携のもとで事前の準備や他のV.L.への連絡なども担う形が定着してきている。後述するV.L.の研修においてもできるものについてはチーフ制を取るようにしており，それらのチーフは研修ごとに交代する。そうしたチーフになった場合にV.L.にかかる負担は小さくないが，その経験はV.L.自身の成長ややりがいにもつながっていると考えられる[13)]。また，新入生にとっても，「理論と実践」授業全体においてそこまでの役割を果たしている先輩V.L.の姿に身近に接することは，これからの大学生活に対するよい刺激になるものと考えている。

(2) ボランティアリーダー養成研修

「理論と実践」授業は，このように毎年数十名からなるV.L.による密接な協力があってはじめて成り立っているが，V.L.にそれだけの役割を果たすことができるのは，研修を通じてその役割についての基本的な理解と基礎的な力とを身に付けているからである。先に図1にも示したように，V.L.がチームとして機能できるようになっていることも大きい。言うまでもなく，そうしたチーム組織がただ学生が集まるだけでできるものではなく，これも大阪府青少年活動財団の協力のもと，チームビルディングなども含めて，年間を通じて計画的に実施している研修の結果であると言えよう。V.L.は，そうした研修また実際のV.L.としての活動――現任訓練（On-the-Job Training, 以下OJTとする）とも言える――を積み重ねることによって，リーダーシップや人間関係のファシリテーションについて多くのことを学んでいっているものと考えられる。

このようにV.L.養成研修と実際の「理論と実践」授業とはいわば車の両輪となって成立しているものであるが，現行のV.L.研修の1年間の流れは表5のとおりとなっている[14)]。他学部の新入生キャンプを実施するにあたっても，事前に2泊3日の学生リーダー研修等が行われているが，人間科学部では，それを1泊2日の研修2回にするとともに，それにプラスして1回の宿泊研修を行っている。計3回の宿泊研修を実施していることになるが，

12) V.L.には授業を通じて関係のできた新入生に対しては，その後もできるだけサポートをしていくように依頼をしている。その一方で，親しくなったとしても，新入生の側が望まない関係を押し付けたりすることにはならないようとの留意も促している。

13) 楠本・三井（2020）は2019年度のV.L.に対して調査を行い，その志望動機を，「リーダーシップや責任感などの自己の成長に繋がると感じたから」の項目に代表される「自己成長」の因子，それから「印象的継続的活動への希求因子」，「先輩リーダーへの憧れ」の3因子にまとめている。

14) 2020年度は新型コロナウイルスの影響により表5に示した流れでの研修は実施できなかったが，それについては後述する。

表５　ボランティアリーダー研修の流れ

位置付け	第Ⅰ期　リーダーの理解とリーダーチームの育成期			
回ほか	説明会	現地説明会	第１回研修	第２回研修
日程と会場	８月下旬 大学内（２時間）	８月末 吉野宮滝野外学校 （日帰り）	10月中旬 吉野宮滝野外学校 （１泊２日）	11月上～中旬 吉野宮滝野外学校 （１泊２日）
研修のねらい	○「リーダーとは」の理解 ○リーダーに求められる資質の理解	○リーダーに求められる技術や資質を実際の活動を通して理解する	○リーダー組織を編成し，より深く人間関係を深める ○活動拠点となる，吉野周辺の理解を深める ○野外活動の知識や技術を学び，キャンプの本質を体感し理解する	○リーダー組織を編成し，より深くチームワークを高める ○活動拠点となる宮滝周辺の理解を深める ○野外活動の知識や技術を学び，キャンプの本質を体感し理解する
研修の主な内容	・「リーダーに求められるもの」講義	・ハートアクティビティ① ・アウトドアクッキング ・ハートアクティビティ②（エレメント）	・ディスカバリーウォーク（大和上市→吉野宮滝野外学校） ・ハートアクティビティ ・アウトドアクッキング ・テント泊 ・野外学校整備ワーク ・リーダーディスカッション	・バス車中の過ごし方 ・吉野宮滝の魅力を知る ・アウトドアクッキング ・ナイト・ディスカバリーウォーク ・ハートアクティビティ ・野外学校整備ワーク ・リーダーディスカッション

第Ⅱ期　本番に向けての準備期		第Ⅲ期　実践活動期	
第３回研修	第４回研修	事前・事後授業	キャンプ実習
３月 大学内（半日）	４月末～５月初旬 吉野宮滝野外学校 （１泊２日）	４月下旬～６月上旬 大学内	５月上～中旬 吉野宮滝野外学校 （１泊２日×２回）
○目指すリーダー像の具体化，明確化	○本番に向けてのチームワーク向上 ○組織と各役割の理解 ○本番での具体的な動きの理解	○実践を通じて，リーダー自身の動き，リーダーチームとしての役割・機能を高める	
・ビーイング ・ハートアクティビティ	・ウォークラリー（コース下見調査） ・組織の理解，役割の理解 ・本番プログラムの内容確認 ・アウトドアクッキング ・野外学校整備ワーク ・新入生受け入れ準備ワーク	・OJT ・毎授業終了後，30分程度の振り返りミーティング	・OJT ・１日目終了後の振り返りミーティング

※第１回，第２回，第４回の各研修についても，それぞれ１～２週間前に学内で説明会（約１時間）を行っている

これはV.L.としての自覚を持ち続けて，翌年の「理論と実践」授業に臨んでもらうためには，単発の研修ではなく，最低でも連続２回＋直前１回の３回の継続的な研修が――実際にはそれに加えて，日帰りの現地説明会や大学内で行う３月研修も――必要であるとの考えによっている。このV.L.養成研修は，次のとおり大きく３段階に分かれており，段階的な養成が計画・実践されている。

第Ⅰ期　リーダー理解とリーダーチームの育成期（８月～11月）：新入生をあまり意識せずに，宿泊研修では，野外活動の技術や知識を習得し，施設周辺の自然やフィールドをより広く深く理解するアクティビティを体験するなど，自らの意識を高め，リーダー集団としてのまとまりを築き，チームワークを強化することに重点を置いている。

第Ⅱ期　本番に向けての準備期（翌３月～４月）：新学期も間近な時期でもあり，新入生に向き合う際に必要なコミュニケーション力や不安な気持ちを和らげる表現力，大学の先輩としての自覚と自信を感じさせる行動力（先輩として，またリーダーとして相応しい，立ち居振る舞いなど）を身に付け，発揮することに重点を置いている。

第Ⅲ期　実践活動期（授業開始～６月終了）：文字通りOJTの時期であり，毎週毎週の授業時間ならびにキャンプ実習本番を通じ，また振返りのミーティング等を重ね，リーダー自身が一番成長する期間である。

ところで，こうしたV.L.研修の形が定まり，そして年度を重ねることによって，V.L.の意識も少しずつ変化してきているように感じられる。それは，V.L.自らが１年生の中心となって話をし，さらには活躍して注目されることを欲するようなタイプから，１年生の活動をサポートし，ファシリテーションするようなタイプへの変化である。そうした変化とあわせて，各V.L.の意識が周りの環境や人のかかわりの状況などにも向かいやすくなっているように思われるし，そのチームとしての意識も高まっているように思われる。それには指導する側の変化もまた影響しているかもしれないが，V.L.が活動の中でそうしたあり方を実際に経験し，そうした意識が育まれて，それがまた引き継がれるといったサイクルの中で変化してきたのではないかと考えられる。もちろん，そうしたリーダーシップのあり方を実現していくということは，個々のV.L.にとってもまたチームとしてのV.L.組織としても簡単なことではないが，そうした意識を基本とすることはV.L.にとっては重要なことと考えられる。念のため付言すると，これはV.L.の個性が認められにくくなってきたということではない。例えば，V.L.のミーティングなどにおいては，サポートするという意識はしっかり持ちながらも，そのためにどうするのがよいかといったことでは，むしろ積極的に意見などが出されるようになってきている。

３．体験学習（キャンプ実習）で得られているもの

(1)「キャンプ実習」に対する学生の満足度

「キャンプ実習」については，その導入当初から，府立野外活動センター（能勢町）あるいは野外学校（吉野町）での体験学習の終了直後に[15]，新入生に対して満足度に関するアンケートを行ってきた。その結果については，すでに楠本ら（2013a）や楠本（2019）において報告されているが，2017年度以降のデータも追加したものを図２に示した。最近の傾向では，「大変有意義だった」との回答が50％前後と以前と比べるとやや低くなってい

15）ただし，2020年度は後述するとおり，新型コロナウイルスの影響によりプログラムが大きく変更になっており，アンケートはパフォーマンスの発表も終えた後の第７回授業時に実施している。

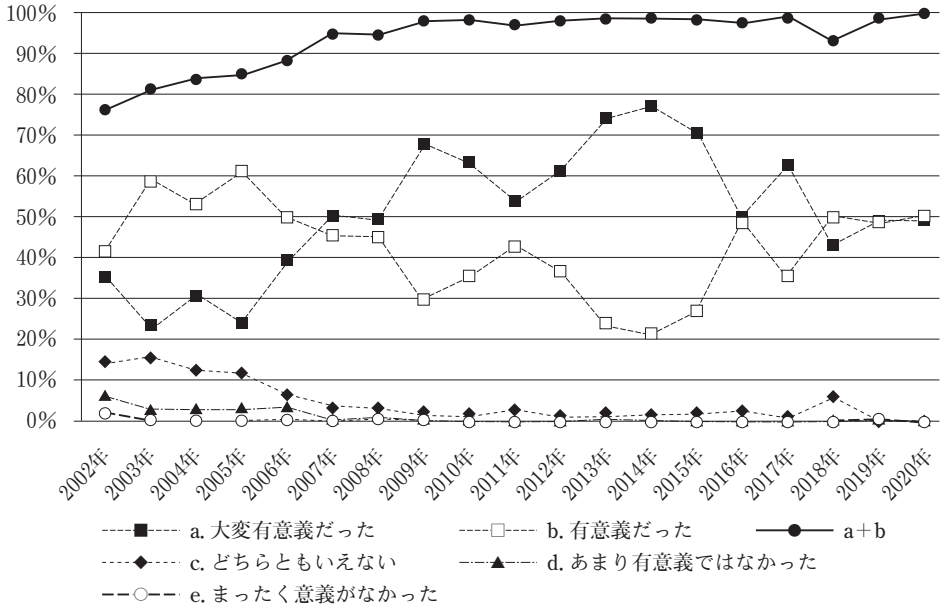

図 2　体験学習（キャンプ）事後アンケートにおける満足値の推移

るものの，「大変有意義だった」と「有意義だった」をあわせると引き続き100％に近い状態が続いていることが分かる。特に2020年度は，その 2 つの回答で欠席者等を除く回答者の100％を占めていた。

(2)「キャンプ実習」を通じて学生が得ている可能性のあるもの

楠本ら（2013a; 2013b）は，2011年度に新入生の「キャンプ実習」に関する意識調査を行い，その結果を報告している。それによれば，「仲間作り」「コミュニケーション」「忍耐力」「協調性」「主体性・積極性」「キャンプの意義」（22項目をこれら 6 分類に分けている）のうち，「コミュニケーション」を除く 5 つについて，事前よりも事後のほうが「キャンプ実習」の評価が高くなっていた。「コミュニケーション」に変化がなかったのは，事前においてその（期待の）評価がすでにかなり高かったためではないかと考えられている。

ところで，「キャンプ実習」終了から約 1 か月を経過した時点で実施しているアンケートにおいても，その体験が活きていると感じている学生の割合は，直後の満足度評価から大きく下がってしまうことはない[16)]。すなわち，「キャンプ実習」で学生が得たものはその後も持続していると考えられるのであるが，ここではさらに，2019年度の卒業時アン

16）2011年度の調査結果（楠本ら，2013a）では，体験学習の4週間後に実施したアンケートで，今回の体験学習（キャンプ）が学校生活や日常生活にどのくらい活きているかとの質問に，「すごく活きている」「活きている」「どちらともいえない」「あまり活きていない」「全く活きていない」の 5 択で回答してもらったところ，「すごく活きている」「活きている」と回答した学生が全体の94.5％を占めていた。

ケートの結果（教育学習支援センター，2020a; 2020b）から「キャンプ実習」の評価にかかわるところも紹介しておきたい。

この調査は，2020年3月14日に本学において全学的に実施されたものである。回答者は全体で1682名で，うち人間科学部の学生が199名，他学部（経済学部，経営学部，情報社会学部）の学生が1483名である。2019年度の卒業であるから，回答した学生の大半は2016年度に「キャンプ実習」（他学部生は新入生キャンプ）を経験していることになる。

さて，このアンケートの問11には，「あなたは大学生活における取り組みや課外活動にどのくらい満足していますか」との質問があり，その1番で新入生キャンプ――人間科学部生は「キャンプ実習」のことと解して回答していると考えられる――について尋ねている。回答は「満足」「やや満足」「やや不満」「不満」「該当なし」の中から1つを選ぶことになっていたが，他学部生ではそのうち「満足」「やや満足」と答えた者がそれぞれ27.2%，38.6%，合わせて65.8%であったのに対して[17]，人間科学部生ではそれぞれ37.7%，41.7%，合わせて79.4%と高くなっていた。また，問12の「入学から卒業までで，印象に残っていると感じることを教えてください」との質問では，①新入生キャンプ，②大学での講義，③ゼミナールでの学習，……と20項目を挙げ，複数回答可により答えてもらっているが，①新入生キャンプを選択した者が，他学部生では25.8%であったの対して人間科学部生では37.7%とかなり高くなっていた。ちなみに，②大学での講義を選択した者は，他学部生では25.1%，人間科学部生では20.1%，③ゼミナールでの学習を選択した者は，他学部生では25.2%，人間科学部生では22.6%であった。卒業時アンケートでも人間科学部卒業生のほうが「キャンプ実習」への満足度が高く，印象にも強く残っているということについては，人間科学部の「キャンプ実習」では事前・事後学習も含めて約2か月にわたって行っていること，またその間V.L.が継続的に丁寧にかかわってくれていることなどが関係しているのではないかと考えられる。

卒業時アンケートではさらに，問13の「大学生活の中で力がついたと思う項目は何ですか」との質問で，①主体性，……，④協調性，……，⑪コミュニケーション力，……など12項目を挙げて，やはり複数回答可で答えてもらっている。その結果，①主体性を選択していた者は他学部生が27.6%，人間科学部生が27.1%とほぼ同じであったが，④協調性を選択していた者は他学部生が27.6%，人間科学部生が37.7%，⑪コミュニケーション力を選択していた者は他学部生が32.8%，人間科学部生が45.2%と，人間科学部卒業生のほうがかなり割合が高くなっていた。これらについては，いろいろな要因が関係しているものと考えられるものの，「キャンプ実習」の取り組みが協調性やコミュニケーション力の向上に影響している可能性もあると言えよう。特に，人間科学部卒業生には他学部の新入生キャンプの学生リーダーに比べてV.L.経験者が割合的に多く含まれていることから[18]，V.L.活動をしてきた経験がそうした評価につながっていることも十分に考えられるところである。V.L.が研修も含めてその活動の積み重ねを通じて培った力が，就職活動等に

17）他学部の数値は，全学部集計の値と人間科学部の値から計算した。以下についても同様である。
18）2019年度の人間科学部卒業生で4年次までV.L.をしていた学生は21名であった。

おいても役立っているという可能性もまた十分に考えられよう。

4．新型コロナウイルス禍のもとでの「人間関係の理論と実践」

(1) 2020年度の取り組み

さて，ここからは2020年度の「人間関係の理論と実践」の授業の実施について述べていきたい。2020年度は新型コロナウイルスの影響により，バスでの移動や施設での宿泊――大人数が参加する実習であるため，宿泊室等で３密となることが避けられず，食事なども集団で一緒にすることになる――を伴う「キャンプ実習」を実施することは困難となった。緊急事態宣言の発令に伴う大阪府からの休業要請を受けて，本学では春学期の授業開始が４月22日に延期されていたが，４月15日にはそれがさらに５月11日に再延期され，春学期については授業はWebで行うということになった。そこで，「人間関係の理論と実践」については，授業方法を工夫するとしてもWebでの授業は困難であり，その目的も満たせないと考えられたところから，その時点で春学期の開講は取りやめる決断をし，学生には「秋学期に延期もしくは中止（検討中）」ということで周知をした。その一方で，秋学期には実施できるようになった場合に備えて，その場合のスケジュールの大枠――この時点ではまだ吉野での１泊２日の「キャンプ実習」を含むもの――を決めておいた。

その後，７月中旬になって大学から秋学期の授業の実施方針が提示され，必要な科目については対面授業も認められることになった。そこで，感染防止策を講じて，吉野での一日体験学習（V. L. については１泊２日の研修も）を含む授業計画を作成して申請をしたところ，７月末に学長より，「学内で感染防止策を徹底したうえでの対面授業については実施可能と判断する。ただし，長時間のバス移動を含む日帰り，宿泊を伴う実習については中止とし，学内での代替プログラムを考えてほしい」との判断が示されたため，それに沿って秋学期の授業を計画していくことになった。また，秋学期の授業の実施に向けて，前年の研修以降は中断になっていたV. L. 研修についてはできるだけ早期に再開することにした。

(2) 2020年度のボランティアリーダー研修

2020年度の「理論と実践」授業に向けてのV. L. 研修は，2019年の８月にスタートし，先に表５に示した流れで第２回研修までは終えていた[19]。春学期の授業が取りやめとなって，V. L. 活動も宙ぶらりんになっていたが，秋学期に学内で授業を行うことが決まって急きょV. L. 研修を再開することにしたところ，第２回までの研修に参加していた29人全員が再び集まってくれた。８月末より再スタートした2020年度のV. L. 研修の内容は表６のとおりであった。前述したV. L. 養成研修の段階としは第Ⅱ期にあたり，V. L. として意

19）ただし，2019年の第１回研修は台風のために中止となり，その替わりの研修を12月に実施した。また，2020年度に向けてはV. L. の大半が１年生という構成になっていたことから，2020年３月の研修は学内ではなく吉野での１泊２日の研修を計画していたが，やはり新型コロナウイルスの影響により，その直前になって中止となっていた。

表6　2020年度ボランティアリーダー研修

（あらためて）第Ⅰ期　リーダーの理解とリーダーチームの育成期				第Ⅲ期　実践活動期
	第Ⅱ期　本番に向けての準備期			
学内研修①	学内研修②	学内研修③	学内研修④	授業および体験実習
8/31（月） 14：00〜17：00	9/19（土） 13：00〜16：00	9/20（日） 9：00〜16：00	10/3（土） 10：00〜13：00	9/27（火） 〜11/18（水）
A33教室	A33教室	A33教室・大学周辺	A33教室・大学周辺	A33・34・大学周辺
○リーダー活動の始動 ○自分自身エンジン始動 ○今期の授業説明 ○今期リーダー研修説明	○リーダー集団としての人間関係づくり ○リーダー運営体制始動	○「学内体験実習」のトライアル	○直前最終確認	○OJT
13：30 チーフ集合 打合せ 入室前　検温・体調確認 14：00 研修開始 オリエンテーション 14：20 説明① 15：20 休憩・換気 15：30 ミーティング 16：00 説明② 17：00 終了・解散 解散前　検温・体調確認	12：30 チーフ集合 打合せ 入室前　検温・体調確認 13：00 研修開始 13：20 ハートアクティビティ① 14：20 休憩・換気 14：30 ハートアクティビティ② 15：30 振返りミーティング 16：00 終了・解散 解散前　検温・体調確認	8：45 チーフ集合 打合せ 入室前　検温・体調確認 9：00 研修開始 ディスカバリーウォーク① 10：30 帰着 振返りミーティング 11：30 フォーマンスについて 12：30 昼食タイム 再開前　検温・体調確認 13：30 研修再開 ディスカバリーウォーク② 15：00 帰着 ディスカバリーウォークチェック 16：00 終了・解散 解散前　検温・体調確認	9：30 チーフ集合 打合せ 入室前　検温・体調確認 10：00 研修開始 ディスカバリーウォークトライアル 11：30 帰着 振返りミーティング 12：30 最終確認 13：00 終了・解散 解散前　検温・体調確認	毎回の授業ならびに体験実習終了後，振返りミーティングで，その日の評価・反省を行い，次回に活かす

識を再始動させるとともに，後述する授業計画にあわせてのリハーサル的な内容がその中心となっている。養成研修を考える際に重要なことは，新入生の体験学習の内容とV.L.研修の内容がリンクしていることである。V.L.が授業や体験学習の内容を熟知していて，それらも巧みに盛り込みながら「V.L.と新入生が会話する関係」を生み出すことができるようになって，V.L.は新入生の不安に応え，安定感や存在感をもってその役割を果たせるようになる。今回，大学周辺を利用してのディスカバリーウォークというのは初めての試みであり，複数回のリハーサルによって，まずV.L.に，「活動の意図，フィールドのエリア，所要時間，負荷の加減，楽しさ，面白さ，危険な箇所」等々をできるだけ把握しておいてもらうことはその意味でも必要なことであった。また，あらかじめ下見なども行っていたものの，研修でのリハーサルを通して，改めてリスクマネジメントも含めて問題点が明確となるということもあった。本番に向けてそれらを具体的に改善することができたということにおいても，今回のV.L.研修は非常に役に立ったところがある。

(3) 2020年度の「人間関係の理論と実践」授業

授業プログラム

9月下旬より対面授業で始めることになった2020年度の「理論と実践」授業プログラムは表7のとおりであった。1泊2日の「キャンプ実習」に代わって，土日を利用して半日ずつ2回の「体験実習」――2020年度は野外の自然を利用したアクティビティはほとんどできなかったので，「キャンプ実習」とは言わず「体験実習」と言うことにする――を実施することにした[20]。また，例年より事前学習の授業を1回増やし，第2回授業でも体験実習（ハートアクティビティ①）[21]を取り入れたが，これは学生同士が交流しあう機会をできるだけ早い段階から設けることを意図したものであった。全体の構成としては，人間関係づくりのハートアクティビティ①②③，キャンパス周辺ディスカバリーウォーク，そこでの発見を含めて班毎に発表を行うパフォーマンス，そして，それらの経験を今後の大学生活へとつないでいくビーイングの作成とその発表がプログラム全体の骨子となっている。それから，今回は残念ながら体験してもらうことのできなかった野外での体験学習の様子などについても理解してもらうために，それを紹介をするオンデマンドのWeb授業をさらに1回加えた構成とした。

新型コロナウイルス感染防止対策

春学期はすべてWeb授業となったために，4月入学した1年生の中には，本授業がほぼ初めて実際に大学に来る機会となった学生も少なからずいた[22]。そうした1年生を，会場となる教室の入口で体温計とアルコール消毒液をもったV. L. が迎えるところから授業は始まった。今回，対面授業を実施を申請するに際しては，次のような感染防止策を取ることとしていた。

- 3密を避けるため，A33とA34の2つの教室を同時に使用し，1教室あたりの学生数がV. L. を含め概ね65名以内となるようにする。
- 授業への出席に際しては，日頃より感染防止に注意するように学生にあらためて周知するとともに，入室時には発熱がないか等を毎回確認する。
- 授業中はマスクを必ず着用する。
- 授業においては，教室の換気に気をつけるとともに，十分な間隔がとれるように配慮す

20）火曜日組と水曜日組をさらに2組ずつに分け，2週にわたって，土日の午前と午後，4回ずつ同じプログラムを実施した。V. L. には，4回ずつ同じプログラムをするということで，いささかハードな活動を強いることになった。

21）HRT＝Human Relation Trainingの略。豊かな人間関係を築くための活動（アクティビティ）の総称で，アメリカ生まれのASE（Action Socialization Experience: 行動社会化体験）を基本に，グループワークの原理とレクリエーション方法を用いて，大阪府青少年活動財団によって体系化された「人間関係づくり」活動。（「HRT」，「ハート」は商標として特許庁登録済み）

22）2020年度の秋学期では，本学部の1年生の場合，本授業以外に基礎演習Ⅱ（1年生の大半が履修するが，教員によってすべて対面授業で行っている場合とWeb授業と対面授業を併用して行っている場合がある）と実習関係の科目でも対面授業が実施されている。

表7　2020年度「人間関係の理論と実践」授業プログラム

第1回　9/29（火）・30（水）	第2回　10/6（火）・7（水）	第3回　10/13（火）・14（水）
オリエンテーション	学内での体験実習1	事前学習
到着順に2教室に振り分け	グループ別に各教室に誘導，A1～F2：A33，G1～L2：A34	
入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認
18：00　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認
18：10　授業開始	18：10　授業開始	18：10　授業開始
挨拶（楠本・村山）	今日の説明	今日の説明
授業概要・狙いの説明(今井)	18：20　（改めて）班編成・発表	18：20　次回学内体験実習の説明
	担当リーダー紹介	ディスカバリーウォーク説明
上回生リーダー紹介	18：30　ハートアクティビティ①	18：50　グループタイム
	アイスブレイク	自己紹介シート・パフォーマンス等
事前アンケート		
19：20　次回連絡	19：20　今日のまとめ	19：20　今日のまとめ
授業日変更等の確認	次回連絡	次回連絡
19：30　授業終了・解散	19：30　授業終了・解散	19：30　授業終了・解散
退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認

第4回　10/17（土）・18（日）		第5回　10/20（火）・21（水）
学外での体験実習		事後学習1
A33教室のみ使用		班別に各教室に
午前9：00～12：30（210分） 火曜A～F班　水曜A～F班	午後13：30～17：00（210分） 火曜G～L班　水曜G～L班	
入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認
9：00　集合・出席確認	13：30　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認
9：10　オリエンテーション	13：40　オリエンテーション	18：10　授業開始
9：20　ディスカバリーウォーク	13：50　ディスカバリーウォーク	グループタイム
3グループが同時に出発	3グループが同時に出発	ディスカバリーウォークのまとめ・発表準備
4回の出発（5分間隔）	4回の出発（5分間隔）	パフォーマンス準備
11：20　順次帰着	15：50　順次帰着	
提出用シート清書等	提出用シート清書等	
パフォーマンス準備	パフォーマンス準備	
12：00　成績発表	16：30　成績発表	19：20　次回連絡
今日のまとめ	今日のまとめ	19：30　授業終了・解散
次回連絡	次回連絡	退室前　検温・体調確認
12：30　終了・解散	17：00　終了・解散	
退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認	

第６回　10/24（土）・25（日）		第７回　10/27（火）・28（水）
学内での体験実習２		事後学習２
A33教室のみ使用		班別に各教室に
午前９：00〜12：30（210分） 火曜Ａ〜Ｆ班　水曜Ａ〜Ｆ班	午後13：30〜17：00（210分） 火曜Ｇ〜Ｌ班　水曜Ｇ〜Ｌ班	
入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認
9：00　集合・出席確認	13：30　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認
9：10　オリエンテーション	13：40　オリエンテーション	18：10　授業開始
9：20　ハートアクティビティ②	13：50　ハートアクティビティ②	今日の説明
グループで課題達成	グループで課題達成	18：20　パフォーマンス準備
10：20　休憩・換気	14：50　休憩・換気	18：40　パフォーマンスタイム
10：30　ハートアクティビティ③	15：00　ハートアクティビティ③	A33教室で６班，A34教室で
全体での課題達成	全体での課題達成	６班が交互に発表，他教室の
13：30　休憩・換気	16：00　休憩・換気	発表は映像で視聴
10：30　グループタイム	16：10　グループタイム	19：20　講評
お互いの理解（シート）	お互いの理解（シート）	今日のまとめ
パフォーマンス準備	パフォーマンス準備	事後アンケート
12：20　今日のまとめ	16：50　今日のまとめ	次回連絡
12：30　終了・解散	17：00　終了・解散	19：30　授業終了・解散
退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認

第８回　11/10（火）・４（水）	第９回　11/17（火）・11（水）	第10回　11/17（火）・18（水）
事後学習３	事後学習４	授業のまとめ・今後に向けて
班別に各教室に	班別に各教室に	班別に各教室に
入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認	入室前　検温・体調確認
18：00　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認	18：00　集合・出席確認
18：10　授業開始	18：10　授業開始	18：10　授業開始
今日の説明	今日の説明	授業まとめとミニ講義
18：20　ビーイング作成	18：20　ビーイング発表準備	
	18：40　ビーイング発表	
	12班×２分※	レポート作成
	19：10　講評	
19：20　今日のまとめ	19：20　今日のまとめ	
後日アンケート（火曜日）	後日アンケート（水曜日）	
次回連絡	次回連絡	19：20　挨拶（大学：楠本・村山）
19：30　授業終了・解散	19：30　授業終了・解散	19：30　授業終了・解散
退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認	退室前　検温・体調確認

※ビーイングの発表方法については，第７回のパフォーマンスタイムと同様

Web授業（オンデマンド）	体験学習のいろいろ

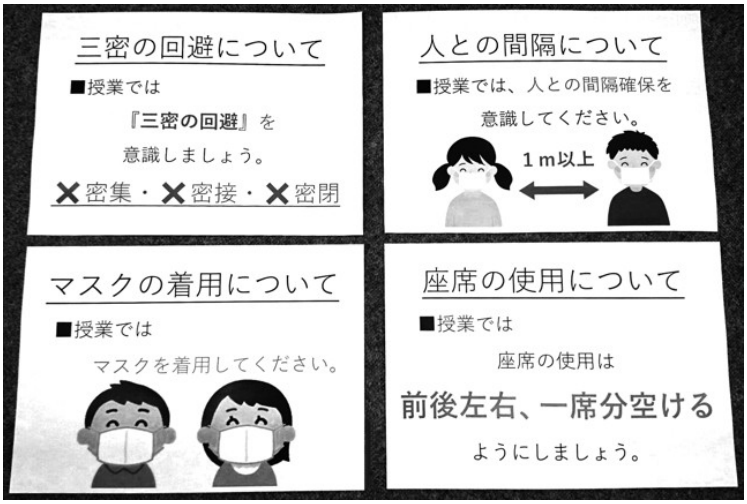

写真１　新型コロナウイルス感染防止策を促す掲示
（大阪府青少年活動財団作成）

る。授業中に行うワークやアクティビティにおいても，それが守れる活動内容とする。

学生への周知については，本学の学生向けのポータルサイト（Keidai Virtual Campus）に掲載のシラバスを通じて行うとともに，初回の授業の際に注意喚起をした。体温測定については，毎回の授業の入退室時にV.L.が非接触型の体温計を用いて実施した[23]。お互いの間隔の確保については，座席に着席する際には１メートル以上空けられる配置とし，共同でワークなどを行う場合にも，グループ毎のテーブル（複数の机をつける）を例年よりも広くすることで互いの距離を取りやすいようにした。また，そうした際に各テーブルに守るべき事項を書いた掲示（写真１）を置いて，常に注意を促すようにした。換気については，気候のよい時節でもあったので，空調だけでなく窓や教室の前後の扉を開けて授業を行った。それから，授業終了時や体験実習でのアクティビティの合間には使用した机をアルコール消毒液を用いて拭くようにした。

教室については，例年であればA33教室（３人がけの可動式の机と椅子が配置されており，収容人数は最大261名）の１教室で行うところを，隣接したA34教室（教室の造りはA33にほぼ同じ）も使用して２教室に分かれて同時に授業を行うことで，３密を避け

23）これは対面授業の申請時の方針に沿って行ったものである。その後，本学では守衛室に体温計が置かれて，キャンパスに入構する際には必ず体温測定がなされることとなった。そのため，そこでの体温測定と二重になるということはあったかもしれないが，結果としては，感染防止意識の維持といった点の他，V.L.が毎回そうした形で新入生に声をかけて体温測定を行うことによって，V.L.と１年生との間に親和性が生まれやすいといった効果もあったと考えている。なお，もしも体温が高かった場合の対応であるが，大学全体の方針に倣って，37.5℃以上の場合には帰宅して静養してもらうこととし，37.0～37.5℃の場合は保健室に連絡して対応してもらうこととした。ただし，気温が高い場合にはその影響で測定の結果が高くなることも考えられた。その場合は，少し離れた他の人のいない場所でしばらく待機をしてもらったうえで，再度測定をして判断するものとした。

る対策を取った。教室のAV機器等を利用して2つの教室をMicrosoft Teamsのチャット機能を使ってつなぎ[24]，一方で話をしている場合は他方ではその映像を視聴するという方法で同時に授業を進めた。また，V. L. は両教室に分かれて，それぞれに各班のGLやチーフが配置されていて，教室ごとにそのチーフが進行をすることもあった。パフォーマンスやビーイングの発表も両教室で同時に行ったが，それぞれの教室に進行役を置いて交互に発表を行うという形で進めた。こうした授業形態については，他方の教室の音声が聞こえにくいといった問題やアクシデントなどもあったが，その都度できるだけの修正や工夫をしながら，今回の授業を何とか乗り切ることができた[25]。

プログラムの一例――キャンパス周辺ディスカバリーウォーク

今回行ったプログラムの中から，その一例として「キャンパス周辺ディスカバリーウォーク」について紹介しておきたい。

ディスカバリーウォークというのは，課題とされたコースをグループごとに歩きながら，周辺の自然や，コースでの歴史や文化，また一緒に行動する仲間について，発見（ディスカバリー）するというものである。これまでの「キャンプ実習」などにおいては，野外プログラムとして晴雨によらず体験してもらっていた重要なアクティビティであった。

3密回避のため，今回は12の班をさらに2分した3～4人にV. L. 1名が付いたグループとし，大学キャンパスをスタート・ゴール地点として，「ごはんがおいしそうな店」「毎日の生活に便利な場所」「ここだけはみんなに伝えたい場所」を探しながら，地図に示されたポイント（大学の近くの駅3か所，寺社や公園5か所）を100分以内でできるだけ多く回るという形で実施した。各ポイントには別のV. L. が待機していて，グループが回ってきたときにはチェックをする――単にチェックするだけではなく，そこにも一つのかかわりがある。すべてのポイントを回れば最短でも6～7kmの道のりとなる。そして，いかに多くのポイントを回ることができたか，探す3つの場所については他のグループとは重ならないところを見つけられたかどうか，また時間が100分を超えた場合には減点することとして，得点を競いあうようにした。競争の要素を取り入れてはいるが，一緒になっていろいろと考えながら行動することによって，その中での発見を通じてメンバーの人となりも理解し，グループ内での人間関係を深めることを主なねらいとしている。半日ずつの体験実習の1回目に設定したのは，身体を動かして一緒に行動する活動を設定することによって，無理なく人間関係を作りやすいと考えたからである。

24）撮影には広角のWebカメラ2台と接続コードを購入し，それを大型のカメラ用の三脚に取り付けて使用した。

25）今回は，対面授業を行う場合には教室の収容人数の1/2以内が目安とされたこと――各曜日，その1年生全員とV. L. についてはその全員が参加した場合，それに近い値となる――や，グループワークの際の配置なども考えて，このような形での実施になった。しかし，もう少し広い教室が確保できたり，また教室のスペースに対してどれだけの人数が許容されると考えるかによっては，1教室で実施するということも考えうるかもしれない。可能であれば1つの教室で行えるに越したことはなく，今後の1つの検討課題である。

また，キャンパス周辺のいろいろな店や場所を探してみるという課題は，そうした場所をできるだけ多く知っておくことが，大学のある（立地する）地域に馴染み，これからの大学生活に役立つことにもつながるだろうと考えたからである[26]。あらためて調べてみると大阪経済大学周辺には由緒ある寺社や史跡などが思いのほか多くあることが分かったが，それらについてはV.L.も初めて行く場所というところが多かった。

なお，今回，土曜日に行った組（火曜日組）についてはあいにくと雨に見舞われ，傘をさしながらのウォークとなったこともあって，すべてのポイントを回ったグループはなかった。一方，日曜日に行った組（水曜日組）は好天に恵まれて，いくつものグループがすべてのポイントを制覇していた[27]。

(4) 2020年度の授業に対する学生の評価とその意義

学生の期待

2020年度の「理論と実践」授業は以上紹介してきたような形で実施をすることになったが，初回の授業で学生に今回の授業への期待を尋ねた結果は，図3のとおりであった。回答した176名のうち実に90.3%の学生が「とても期待している」もしくは「期待している」と答えている。楠本ら（2013a）が報告している2011年の調査結果ではこの値は75.3%になっており，今回の学生の授業への期待の高さをうかがわせる。アンケートではそのように回答した理由についても尋ねていたが，それらの自由記述に出現していた単語のうち上位にあったもの出現回数を示したのが表8である。表8には，比較のために2019年度のデータも合わせて示している。2020年度には「対面」「オンライン」「コロナ」など2020年度の特徴と思われる単語が出現している他，「授業」「期待」「大学」「学期」「春」と言った単語が多く出現しており，このことからも，コロナによって春学期は思っていたような学生生活を送れなかったことから，この授業に期待している様子がうかがえると言えよう。また，2019年度に比べて「新しい」「仲良く」「楽しい」といった単語の出現が少なくなっていることも，2020年度の特徴をなしていると思われる。

26）人間科学部の「体験実習」としての発見（ディスカバリー）の素材として，「大学周辺の人間，人間模様，人間関係」の発見を課題とする案も考えたが，限られた準備時間の制約と，プログラムとしての構成の難しさ，及びV.L.への周知等の点から，今回は，「人の発見」ではなく「場所・お店の発見」に設定した。それから企画段階では，デジタル時代での人間関係づくりとして，スマホの活用（地図情報や，課題の通知や，位置確認など）も考えたが，オンラインでの授業中心となっている状況でもある中で，対面授業での実習として「会話や対話の飛び交うリアルな体験活動」にこだわり，スマホの利用等は，緊急連絡用としてV.L.が使用するのみ，といった制限をするルールとした。

27）そうした影響もあってか，後日アンケートの「印象に残っているプログラムは何ですか？　1番から順に3つ答えてください。」との質問に対する回答では，水曜日組ではディスカバリーウォークを1番に挙げている者が51%であったのに対し，火曜日組では22%であった。火曜日組がもっとも多く1番に挙げていたのはハートアクティビティの59%であった。

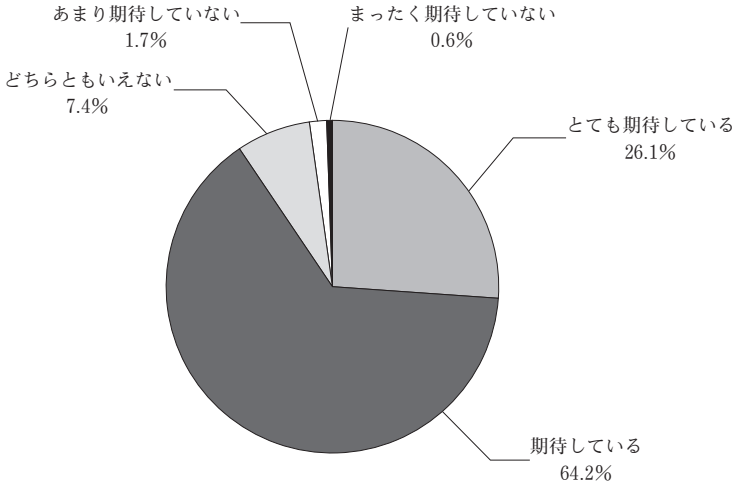

図 3　2020年度の体験実習に対する期待値（事前アンケート）

表 8　2019年度と2020年度の事前アンケートの自由記述における頻出ワード

2019年度						2020年度					
順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数	順位	抽出語	回数
1	友達	63	21	楽しむ	5	1	友達	79	21	交流	10
2	人	40		言う	5	2	人	53		少ない	10
3	思う	33		交流	5	3	思う	42		新しい	10
4	新しい*	23		色々	5	4	授業*	32		人間	10
5	仲良く*	17		人間	5	5	期待†	26		良い	10
6	楽しい*	16		体験	5	6	大学*	24	26	学部	9
7	コミュニケーション	13		大学	5	7	作る	21		今	9
	作る	13		知る	5	8	体験	19		増える	9
	増える	13		聞く	5		友人	19		話す	9
10	たくさん	11		友人	5	10	たくさん	17	30	楽しい	8
11	機会	10		（以下略）			機会	17	31	オンライン†	7
12	関係	9					実習*	17		キャンプ	7
	良い	9				13	関わる	16		コミュニケーション	7
14	話す	8					先輩*	16		コロナ†	7
15	キャンプ	7				15	学期*	15		感じる	7
	期待	7				16	作れる	13		経験	7
	自然*	7					春*	13		（以下略）	
	学部	6				18	関係	12			
18	関わる	6				19	対面*	11			
20	作れる	6		総数	521		仲良く	11		総数	877

____は χ^2 検定の結果その年度で多くなっていた語（＊p＜.05，†p＜.10）

体験実習に対する学生の評価

2020年度の「体験実習」実施後の学生の満足度については，すでに学生の満足度の推移を表した図 2 の中に2020年度の結果についても一緒に示しておいた。2020年度は，吉野での「キャンプ実習」ができなかったにもかかわらず，その満足度は例年と同等もしくはそれ以上の結果となっていた。また，後日アンケート（回答者数173名）では，今回の体験学習がどのくらい学校生活や日常生活に活きてるか（活用度）について尋ねているが，そ

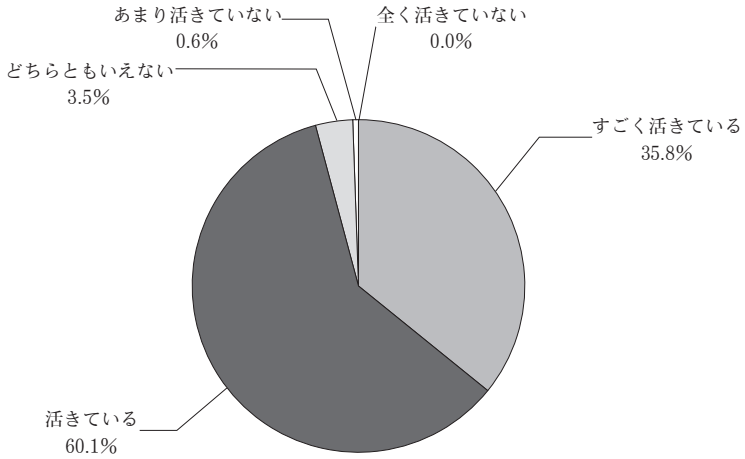

図４　2020年度の体験実習後のその活用値（後日アンケート）

の回答の分布は図４のとおりであり，こちらも例年と同等の結果を示していた。

2020年度に認められる特徴

後日アンケートで尋ねた活用度については，そのように答えた理由についてもあわせて自由記述により答えてもらっている。それによれば，「すごく活きている」「活きている」を選んでいる場合には，次のような理由（抜粋）が述べられていた。

・春学期の間，まったく人と関わらず，コミュニケーション能力がおちていた状態だったので，この学内キャンプがとても有意義に感じた。
・大学に通えるという点で，「すごく活きている」と感じた。一部とは言え，「普通」の大学生として過ごせることがうれしい。
・みんなと楽しく授業を受けることができて，唯一大学生だと感じることができた授業だった。
・対面授業だったこの授業のおかげで，友達関係が広がった。
・週１回しかない対面授業なので，貴重なものだと感じている。
・みんなと話すことで，コミュニケーションスキルや会話力がついたと思う。
・人の意見を聞く力が養われ，日常に役立っている。
・人と積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲がわいた。
・今までコミュニケーションをとることが苦手だったけど，今は前より成長していると感じている。
・人との関わりの大切さを実感できた。
・同級生，先輩と知り合うことができたので，大学生活が送りやすくなった。

「どちらともいえない」「あまり活きていない」「全く活きていない」を選んでいた者はごく少数であったが，その場合は次のような理由が挙げられていた。

・学生生活はほとんどオンラインだし，日常生活でも他者と関わる機会がないので，何とも言えない。
・変化があまり実感できなかった。

あまり活きていない等と答えている場合でも，その理由は，授業が終了してしまえば，また元の他の学生とはほとんどかかわることのない状況に戻ってしまうといったことにあった。

これらアンケートの自由記述では，「コロナ禍で大学での対面授業が制限される中，大学に行くことや対面授業に臨むことに内心は不安があったが，感染対策に様々な工夫が凝らされている」「キャンプは中止になったが，よく考えられた活動で授業が構成されている」「先輩の親身になって対応してくれる存在に助けられた」など，これまであまり目にすることのなかった「大経大の対面授業の決定や，人間科学部の先生方，サポーターの先輩方に対する感謝の気持ち」を述べたものも多く認められた。2020年度の「理論と実践」授業については，授業のねらいとしている人間関係づくりもさることながら，新型コロナウイルス禍のもとで多くの授業がWeb授業となる中で，対面授業でしかも学生同士が交流できる内容を多く取り入れた授業を実施できたことが，その評価にも大きく関係していたことがうかがえる[28)]。

新型コロナウイルス禍のもとでの「人間関係の理論と実践」の意義

以上のような学生の評価からは，今回，学内における対面授業として，「体験実習」を取り入れた「人間関係の理論と実践」の授業を実施できたことには，大きな意味があったと考えられる。2020年度の春学期はすべてWeb授業となり，1年生は大学に入学後もキャンパスに来る機会が全くなく，学生同士がかかわりあうこともほとんどできなかった。そうした中，秋学期にはなったが，人間科学部の1年生全員が参加し，1年生同士さらには上級生とも直接にかかわり合える機会を持つことができたことは，新鮮で意義深い体験になったと思われる。学生同士が直接にかかわり合って，その人間関係を通じて学び合い成長していきたいという学生のニーズには非常に高いものがあると言えよう。

また，2021年度の授業に向けてのV. L. を募集したところ，1年生からは全体の約4分の1にあたる44名もの学生から応募があった。これはV. L. への関心と同時に，2020年度は，大学には入ったもののなかなか学生同士で人間関係を作る機会もない状況で，V. L. 活動にそうした活動の場（あるいは大学での居場所）を求めてというところもあるのではないかと考えられる。なおしばらくは，新型コロナウイルスの影響により活動がいろいろと制約されると考えられる中で，授業が終われば元の木阿弥というのではなく，人間関係をつないでいく機会を学生にできるだけ提供していくことも必要になっていると思われる。

28）Webのオンデマンド授業視聴後に提出してもらう課題の最後に授業内容についての感想や気付きなどを答えてもらう項目を入れておいたところ，記載されている感想の多くは今回の授業に対してポジティブな内容のものであった。コロナ禍のもとでの学生の思いをより十分に理解してもらうために，それらの一部を本論文の巻末に資料として掲載した。

５．ま　と　め

以上，大阪経済大学人間科学部がその開設時から継続して行ってきている「体験学習（キャンプ）」の実践について，その19年間の推移を報告した。６年目の2007年からは「人間関係の理論と実践」として授業化されて今日に至っているが，全体を通して，上級生であるV.L.の全面的な協力を得て実施されており，「理論と実践」授業とV.L.研修とが車の両輪となって営まれていると言える。「キャンプ実習」に対する１年生の満足度をみても非常に高い状態が維持されており，その経験はその後の学生生活においても活かされてる可能性が高い。その中には，V.L.として活動するということも含まるが，そのための研修を含めてV.L.として活動することがまた，学生にとって貴重な学びの機会となっていると考えられる。

2020年度は，新型コロナウイルスの問題により，例年のように春学期に吉野での「キャンプ実習」を含めての授業を実施することはできなかったが，感染防止策を十分に講じることで，秋学期には学内およびその周辺を利用して対面授業を実施することができた。入学はしたものの，大学に来ることがはできず，Webで授業を受けていた１年生にとっては，この授業はほとんど初めて経験する学生同士での人間関係を直接に体験する機会となった。そして，実際に授業を実施してみると，学生の人間関係への期待やそれを求める気持ちには予想以上に強いものがあり，それは授業の中で実施したアンケートの結果などにもはっきりと現れていた[29]。状況によっては感染防止を最優先とせざるをえないことは言うまでもないが，対策を可能な限り取りながら，学生同士また学生と教職員が直接にかかわり合い，その人間関係を通じて学び成長できる機会を設けるということは大学としての大きな責務であるように思われる。

2020年度の「理論と実践」授業では，吉野の自然の中での１泊２日の「キャンプ実習」はできなかったにもかかわらず，その満足度においては例年と同等の高い結果となっている。学内ならびに大学周辺というように活動場所が限られて，例年のようなダイナミックな活動はできない中でもそのような結果が得られたことについては，授業の中でV.L.が果たしてくれた役割が例年以上に大きかったのではないかと考えている[30]。また，そもそ

29）今回実施した授業内容について，１年生からは例年と同等の高い評価が得られていることから，そうであれば，ずっと学内および大学周辺で体験実習をすればよいのではないかと考える向きもあるかもしれない。しかしながら，2020年度の授業内容は，あくまでコロナ禍のもとにもかかわらずこれだけのことができたということにおいて評価されているものである。コロナ禍のもとでなかったならば，それは吉野の自然も活かしつつ，野外を中心に行われるダイナミックな活動を主とする体験実習にはそのまま替わりうるものではない。また，例年での吉野での体験実習以上に，2020年度はV.L.に心理的に大きな負担をかける結果となっており，ずっとそのような形で継続できるものとは考えにくい。野外の自然の中でできるからこそ，活動が促され，潜在している力が出てくるところもあるのであり，できる限りは，自然の中でのいろいろな活動も取り入れた体験実習ができることが望ましいと考えられる。

30）例年，V.L.は揃いのユニフォーム（Tシャツ・トレーナー等）で「キャンプ実習」での活動を行う

もこの突然の状況の中で今回授業を実施できたこと自体が，それに対応できるだけの潜在的な力を備えていたV. L. 組織がこれまでの積み重ねによりできていたからこそだとも言えよう。V. L. 諸君に対してはここであらためてお礼を述べておきたいとも思う。

最後に，これからのV. L. の可能性についても付言しておきたい。岡山理科大学の副学長で本学の教育・学習支援センター副センター長でもある秦によれば，これからは学生参画型の大学運営を推進していくことが求められているとのことである（秦，2020）。その参画のあり方としては，ボランティア，リーダーシップ教育，ピア・サポート，学生からのヒアリングなどが考えられる。沖・宮浦・林・井上（2011）によれば，初年次教育に欠かすことができないものとしてピア・リーダーシップ・プログラムが挙げられるが，それは，「……選抜された上級生が，訓練を受けた後，主に①オリエンテーション・プログラム，②リメディアル授業，③アカデミック・アドバイジング，④寮生活における新入生対象プログラム等に従事する」というものである。「人間関係の理論と実践」が正規授業と初年次教育という2つ性格を有していることについては初めに述べたとおりであるが，V. L. が果たしてくれている役割にはこのピア・リーダーシップとも大きく重なるところがあると思われる。学生参画型の大学運営を推進するに際して，V. L.がその先駆となるということは十分に考えられることである。そうした学生を継続して育成していくためには，大学としても努力と労力，また費用も必要であるが，それらの学生がこれからの学生参画型の大学運営の一端を担う存在になってくれる可能性もある。

引用文献

秦敬治．(2020)．高等教育政策の現状と本学における課題．FD/SDフォーラム資料（未公刊）

楠本秀忠．(2019)．「体験学習（キャンプ）」が新入生に与える影響(3)――満足値における15年間の推移――．大阪経大論集，69(6)，23-33

楠本秀忠・三井規裕．(2020)．学生ボランティアキャンプリーダーの志望動機について．大阪経大論集，70(6)，7-15

楠本秀忠・中尾美喜夫・谷所慶．(2013a)．体験学習（キャンプ）が新入生に及ぼす影響(1)．大阪経大論集，63(6)，57-70

楠本秀忠・中尾美喜夫・谷所慶．(2013b)．体験学習（キャンプ）が新入生に及ぼす影響(2)．大阪経大論集，64(1)，257-266

教育学習支援センター．(2020a)．【全学部集計】卒業時アンケート（2019年度）．報告資料（未公刊）

教育学習支援センター．(2020b)．【集計】人間科学部卒業時アンケート（2019年度）．報告資料（未公刊）

が，授業中は私服で授業支援を行っていた。今年度は，「理論と実践」授業全体を通じ，揃いのユニフォームで授業の支援を行うことで，新入生に安心感と信頼感を与えることとなり，先輩としての存在感も示すこととなった。服装は，時としてその存在を活かすことがあるが，今回は，イレギュラーでの出番で準備不足の感もあっただけに，このユニフォームは大きな力を発揮していたと思われた。

沖裕貴・宮浦崇・林泰子・井上史子．(2011)．高等教育における学生参画の制度――立命館大学の事例を中心に（日本教育情報学会第27回年会教育情報のイノベーション――デジタル世代をどう導くか)．年会論文集，27，74-77

資料　2020年度の「人間関係の理論と実践」対する感想から

感想以外に授業に対する気づき（改善を要する点）でもいろいろと貴重な意見があったが，ここでは主に感想だけを取り上げている。また，その中でもコロナ禍のもとでの授業であったがゆえの感想を中心に抽出している。

- 今年はコロナにより，学校にはほぼ行けなくなりましたが，「人間関係の理論と実践」のおかけで，初めて誰かと話せてとても嬉しかったです。
- 対面授業が少ない中でこの授業で人間関係が広がりすごく楽しい授業でした。ありがとうございました。
- このコロナのせいで人と関わる機会が激減していたので，この講義があって本当に良かったと思うし，うれしかったです。
- 友人作りの機会を設けてくれたことはすごくよかったと思います。特に今年は対面授業がほとんどないこともあり，よい時間だったと思います。
- 人と関わる機会がはるかに多くなり，大変充実した授業だった。なかなかあの人数で協力して何かを成し遂げるということがなかったので貴重な経験でした。
- この授業は，私にとって数少ない対面授業の１つであった。ハートアクティビティやビーイングにより，オンライン授業のみでは得られないコミュニケーション能力が成長したと実感している。また，グループリーダーを検討する積極性も養うことが出来た。
- 人間関係の理論と実践の授業を通して，人と関わることの楽しさに改めて気づかされました。コロナのなか，対面の授業がほとんどなかったので，新しい同級生，先輩，先生に出会えたことがとてもうれしかったです。一人では楽しくないことでもみんなですると盛り上がり楽しいことが多くありました。自分では思いつかない案を誰かが思いつき，みんなに発信し実行していくことが楽しかったです。
- 私は対面授業がこの授業と，ゼミで週１回行くか行かないかだったので，とても楽しかったです。こういう時期だから，友達ができるのかとか色々心配していたけど，この授業のおかげで喋る人もできてよかったなと思います。個人的には，リーダー抜きのグループのみんなだけで他愛もない会話とかができたらよかったんじゃないかなと思いました。
- 今年は新型コロナウイルスの影響で，キャンプが中止になり，この授業もどうなるのかと思いましたが，無事に授業を終えることができて良かったです。また，春学期がオンライン授業となり，友だちができるか不安でしたが，この授業を通して，知り合えた友だちもいて，とても楽しかったです。キャンプが中止になったのは悲しかったけれど，先生方やリーダーさんのおかげで人間関係を楽しく学ぶことができました。ありがとうございました。
- 授業内容に関しては自分はかなり満足しています。普段授業で接している人でも顔が見えると違う印象を受けたり，話すことのなかったような人とも話すことができてとても楽しかったです。もっとこういった機会があるといいなと思います。
- 「人間関係の理論と実践」の講義では，他の講義より比較的，多くの友達を作ることができ

ました。また，GLの人達と交流を持つ機会も初めてだったので，私の大学生活の人間関係を広めるきっかけになりました。なので，とてもこの講義には感謝しています。ありがとうございました。

- この授業はコロナ禍での人とのつながりが作りづらいときに人との関わる機会を与えてくれた授業なのでとても感謝しています。上回生の人々とも交流ができて素晴らしい授業だと思います。短い間でしたがありがとうございました。
- 今年度はオンライン授業ばかりだったので人と交流することがあまりなかった分，グループワークを通じて人と関わることができて嬉しかったです。
- 春学期は友達を思うように作れなかったけどこの授業のおかげで，１人でも友達を作ることが出来て良かったです。また，リーダーの人たちがチーム全体を支えて下さり，難しい課題挑戦もあったけど成功することができ，リーダーの存在の大きさに改めて気づきました。特に，ディスカバリーウォークでは，チーム全体のモチベーションをリーダーの方たちがあげて下さり何とか達成することが出来ました。貴重な体験をすることが出来てよかったです。
- 今回の授業では唯一の対面授業となり，コロナ禍で人と話せる機会となったので良かったです。前で発表するのは得意ではありませんでしたがリーダーの先輩方のサポートもあって楽しく取り組むことが出来ました。
- 新型コロナウイルスの影響で同学年の学生と接する機会が少なかったなかで，様々な活動を通して同学年の学生だけでなく先輩や先生方などの色んな人と接することが出来て，とても楽しかった。人と接することはとても有意義なものだと改めて感じられた。
- コロナがあっての初めての試みだった学内でのアクティビティーなど少し不安な部分はあったのですが，それはそれで楽しく活動することができました，また，それによって，大学に入って友達もいない中で友達を作ることもでき，とても充実した授業だったなと感じています。
- このようなコロナ禍の中だったので，例年のようにキャンプに行くことはできなかったけど，そのなかでも，ディスカバリーウォークやハートアクティビティのようなプログラムを工夫して考えて下さって，とてもうれしかったです。特に，みんなの前で発表するような機会はなかなかないので，みんなで意見をまとめて発表する機会があったのは，とても良い経験になったと思います。ありがとうございました。
- 初めての対面授業で不安が募る中，なかなか友達を作ることができなかった。しかし優しい先輩たちのおかげで自分の班の枠を超えて多くの生徒と話すことが出来た。その時に初めて大学生というものを実感した。お互い知り合って間もないのにディスカバリーウォークなどのイベントを通してとても仲良くなれたし，何より人見知りが少し改善されたと思う。私はこの授業を通して人と話すことがとても好きになった。この経験を活かしてこれからの大学生活を送りたいと思う。
- 全体を通して楽しく人間関係を築けた授業でした。この授業があったからこそ築けた人間関係や人間関係の重要さを改めて感じることができました。コロナ禍ではありましたが，多くの先輩方や先生方の協力と支えがあって行えた授業だと思います。ありがとうございました。
- コロナウイルスの影響でキャンプは無くなってしまったが，ハートアクティビティはとても楽しかったです。人との繋がりが薄れやすい「今」だからこそ積極的にコミュニケーションをとる機会があり，本当によかったです。またグループワークをするうちに仲が深まるのが嬉しかったです。他の班と交流することが少なかったので，もう少し他の班と交流したかっ

たと思いました。もう一つの教室にいる人とは話す機会が一度もなかったので，色々な人と話してみたかったです。

- 今回はコロナの影響で例年のようなキャンプはできなかったけど，先生がコロナの状況でもできることを探してくれて，先輩方が精いっぱい手助けしてくれたおかげで楽しむことができました。学校に行くことが少ない中でこの授業で同じ学部のこと話す機会ができてとても友達作りに役立てることができました。
- コロナ禍で人と全く接することのない期間が続き，久しぶりに大勢と接したことで人の繋がりがどれほど重要なのかを再認識できました。周りは全く知らない人ばかりの中，同じ１回生の人と仲良くなるのにもリーダーの人には本当に助けられたし，大学生活を始めるには必要不可欠な時間だと思いました。
- 今回,「人間関係の理論と実践」の授業でいろいろな経験をして，とても楽しかったです。コロナ禍でまだ一度も大学で講義を受けたことがなかったので，グループの人とはたくさん話をすることができ，友人も作ることができました。ハートアクティビティもとても楽しかったのですが，もう少し広い部屋を使ってもっと長い時間できたら更に楽しかったかなと思いました。
- 様々な人と関わることができたこの講義は非常に有意義だったし，同じ学部の人たちコミュニケーションを取ったり協力してひとつの課題に取り組むことでその場では仲が深まったと思う。しかし，対面講義終了後に班のメンバーとの交流があるかといえばそうでもなく（これは私の班だけかもしれないが）その点に関しては残念であった。
- 対面講義が全く無かったので，このような機会を設けてもらってありがたかったです。グループワークはもちろん楽しかったのですが，他のグループとの交流機会が少なかったので来年はもう少し増やしても良いのではないでしょうか。
- 楽しみにしていたキャンプがなくなり，望んでいた形とは違った授業でしたが，授業目的であった，縦と横のつながりを結ぶことができたと思います。この授業がなければさらに今の学校生活は寂しくなっていたと思いますので，今回リーダーをはじめ，たくさんの方々が考え，行動していたのだと実感しました。本当に素敵な時間と，授業をありがとうございました。
- 班で動くことが多かったので班のメンバーと話すことができるようになりました。しかし他の班の人と関わる機会が少なかったのであまり人脈は広がらなかったと思います。なのでもう少したくさんの人と関われるような時間があればよかったのかなと思いました。今年は特殊な形で行ったので制限があったと思いますがコロナ禍でもできることが数多くあるのだなと思いました。短い間でしたが同学年，先輩，先生方と時間を共有することができ，たくさんのことが経験できました。ありがとうございました。
- キャンプには行けませんでしたが，だからこそ得られたものもあったと思うし，楽しく参加できたと思います。ありがとうございました。
- 一番最期に行ったコロナ禍の状況の中でどのように行動すれば良いかを考え発表する授業は今年だからこその授業だったなと思ったし，これから先もずっと印象に残る授業だと思った。